

知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集: 愛宕町教会・総務部 発行者: 北 紀吉 発行所: 甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyokai/>

みことば

人が心に思うこと

聖書 創世記第八章十三〜二二節

牧師 北 紀吉

ノアが六百一歳のとき、最初の月の一日に、地上の水は乾いた。ノアは箱舟の覆いを取り外して眺めた。見よ、地の面は乾いていた。第二の月の二十七日になると、地はすっかり乾いた。神はノアに仰せになった。「さあ、あなたもあなたの妻も、息子も嫁も、皆一緒に箱舟から出なさい。すべて肉なるもののうちからあなたのもとにきたすべての動物、鳥も家畜も地を這うものも一緒に連れ出し、地に群がり、地上で子を産み、増えるようにしなさい。」そこで、ノアは息子や妻や嫁と共に外へ出た。獣、這うもの、鳥、地に群がるもの、それぞれすべて箱舟から出た。ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた。主は有めの香りをかいで、御心に言われた。「人に對して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも、暑さも、夏も冬も、昼も夜も、やむことはない。」

神は、地上に人が増え始めて、人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っている

のをご覧になって、心を痛められ、地上から悪を拭い去ろうと大洪水を下されました。その際、ノアは神の好意を得て箱舟を造り、洪水の間神に守られて、神の呪いから逃れることが出来ました。

ノアは洪水が去った後、「主のために祭壇を築き」ました。神は、焼き尽くす献げ物の香りをかいで、心に言ってくださいました。「人に對して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも、暑さも、夏も冬も、昼も夜も、やむことはない。」

神は、地上に四十日四十夜雨を降らせ、大水が山々をも覆いつくし息のあるものはことごとく息絶えました。ただ、好意を得たノアと動物たちが箱舟に乗り、命救われたのです。ノアがなぜ選ばれたか。それは、神の好意によるのです。ノアが特別に優れていたということが前提ではありません。あくま

でも神の好意によるのです。神が裁きを下す際にも、尚、神の好意が示されていたのです。神の好意によつてこそノアたちは救われたのです。裁きの中に尚、神は救いを用意してくださいといふのです。思うのです。人の救いとは、神の好意によると。私共が救われたのは、ただただ、神のご好意によるのです。それが主イエス・キリストまでも下さったということです。

神は、ノアが献げた^{なだ}宥めの献げ物を受け入れ、言ってくださいます。「人に對して大地を呪うことは二度とすまい」と。人のゆえに大地は呪われます。今日の温暖化、環境破壊は、まさに人の欲望の結果です。しかし神は、呪わない、すなわち滅ぼさない、と言ってくださいさるのです。尚、人の罪にも拘らず守ろうと言われるのです。どうしてか。それは、「人が心に思うことは、幼いときから悪い」からだと言われるのです。

神は、知っておられるのです。裁くことでは問題が解決しないことを。裁きによつては人の思いが変わりはしないことを。神を畏れ、自らが人として、へりくだって生きることが出来ないことを知っておられるのです。人は、裁かれ、罰せられることで自らの思いを変えることが出来ず、かえって反感を覚えるものです。人として真実に生きるどころか、かえって神に反発して遠ざかるのみなのです。

それゆえに、神は新しい決意を示されたのです。裁きをもつてではなく、忍耐と寛容を持つて罪なる人(被造物)に関わりうと。悪いものを変えようとするのではなく、神が思いを変えてくださって、悪いものに尚も関わって下さるうと言ってくださいさるのです。なんと神の言葉でしょう。心が震えます。神は人が良いものであるから愛するということではありません。どんなに悪いものであろうと、尚、愛するということです。感謝のほかありません。

人は、幼いから穢^{けが}れないというではありません。穢れ無きがゆえに、かえって罪深い。罪を罪とも知らずにいることの方がかえって悲惨です。また、今日のように親の管理下にあれば、親の思いが反映しないわけがありません。そしてわが子に思う親の思いは身勝手です。人は幼きより悪い、神は人の罪深さを人以上に御存知です。そうでありながら、いえ、そうだからこそ言ってくださいさるのです。二度と滅ぼさない」と。

神は、地球環境を破壊してやまない私共、罪なる者に言ってくださいさる。地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも、寒さも暑さも、昼も夜も、やむことはない。地の秩序を守ると。人の希望はただ神にのみあります。何処までも罪でしかない私共に限りない忍耐と寛容を持って関わってくださいさる神にのみ望みがあるのです。

受洗にあたって

信仰告白

信仰告白



荻野 優

わたしが洗礼を受けようと思ったのは、北眞智子さんから「クリスマスに洗礼を受けないか」と聞かれた時です。クリスマスは特別な日だし、前々からお父さんに洗礼を受けることを考えてみるように言われていたので、すんなりと受けいれられました。

わたしは、家族みんなクリスマスチャンです。

特に、おじいちゃんはとてもすごいと思います。わたしが学校から帰って来ると、いつも聖書を読んでいたし、食事の前には主の祈りや、ほかにもお祈りをしてくれて、病気をした後も

毎日ワープロを打っていて、いつもすごいな、と思っていました。

わたしは、これからクリスマスチャンとして、おじいちゃんのように聖書を読み、お祈りをし、たくさん礼拝に出ていきます。神さまが守っていてくださるので、安心して進んで行けます。神さまに頼って生きていきたいです。

(二〇〇七年十二月二三日、クリスマス礼拝にて受洗)

信仰告白



船木あゆみ

私は、クリスマスチャンの家庭に生まれ、今まで自分の心の中で

イエス様を信じて来ました。心の中で思い信じていけばイエス様がいつも共に居てくれると思いい込んでいたからです。

十八年前に、この愛宕町教会で結婚式を挙げ、二人の子供を授かりました。しかし、自分の生活を第一にし、教会を拒み、年を重ねれば重ねる程、私にとつて教会は敷居が高く、とても遠い所になって行きました。自分自身、神様から心を閉ざしていたように思います。

そんな私ですが、何処かで教会と関わって行きたいという思いがありました。でも、自分が直接教会に関わるのではなく、母を通し、また子供たちを通して関わって行けるだけで十分でした。

二〇〇六年の十二月に、古屋律子姉から金曜礼拝のお誘いを受けました。私は、教会を拒み続けて生きて来たので、どうしても踏み出す勇気が持てずに金曜礼拝の朝まで悩み迷っていました。そんな私に、神様は勇気を与えて導いてくださいました。

あれから一年、聖霊に導かれ、毎週の主日礼拝で、イエス様の一つ一つの御言葉が私の中に入ってきて来ました。ヨハネによる福音書の中でイエス様は「わたしのもとに来る者を、わたしは追い出さない。わたしを信じなさい」と愚かで無力な私を捕らえ、放さずに招き入れてくださいました。

まだ、心の中で迷いがあつた時、御言葉が重くて牧師先生と目があつた際、目を反らしたこともありました。でも、自分の罪がなんであるかも知ることが出来ました。

私の上に聖霊の導きと、イエス様の御言葉と、牧師先生のキリスト教教理の学びが有ったからこそ、今日の私があると思います。日々の生活の中で辛く苦しい時も、自分を見失わずに前向きにここまで来れたのも、神様が私をありのままにしし人格を与えてくださった御陰です。

十字架と復活の贖いによって、私の罪をも赦してください。神の民としてくださるイエス様の恵みとあわれみに心より感謝いたします。

これからも、イエス様が私の救い主と信じ、御言葉に聴き従い、主を祈り求め、すべて委ね、日々の生活の中で希望を持ち、感謝しつつ歩みたいと思います。

最後に、教理の学びでいつも支えて祈ってくださいた牧師先生ご夫妻を始め、私のことを気にかけ面倒をみてくださった古屋さんご夫妻、この日お待ち望み、自分のことよりも私の家族のために祈り続けてくれた母、いつも温かく迎え入れてくださった教会の方々に感謝しています。

(二〇〇八年一月六日、主日礼拝にて受洗)

信仰告白



宮澤 祐紀

僕は赤ちゃんのころから教会学校に來ています。ようちえんは、聖愛ようちえんでした。きがついた時にはもう教会学校にいました。教会学校では、友達が大勢いて楽しかったです。

小学校は池田小学校で、低学年の時初めてのえんそくがありました。愛宕山に行つて遊具で遊んだりしました。

教会学校では、海へ行ったり、山の方へ行ったり、いろいろな所へ行つたので、とても楽しかったです。

中高科は、幼小科とちがつて人数が少ないです。もつと大勢いるといいなと思いました。

受洗のきつかけは、わたなべ先生にすめられて受洗しようと思ひました。イエス様を神様の子どもとして、しんじます。これからは礼はいを守つて、聖書の勉強をします。

僕のために祈つてくれたみなさんに感謝します。これからもよろしくお願ひし

ます。

(二〇〇八年三月二三日、
イースター礼拝にて受洗)

信仰告白



宮澤 俊昭

ぼくの家では、おばあちゃんとお母さんと教会に来ています。ぼくは赤ちゃんのときからつれられて教会に来ていました。ぼくが教会に来ていて一番楽しかったのは、教会学校で行った、ますつりやキャンプです。

ぼくが小学校四年生の時、黒平でキャンプしました。バーベキューの時にかみなりがなって雨がふり、初めての経験をしました。かわらで石をひろって工作をして、とても楽しい思い出です。ますつりではつれなかったけれど、ますがおいしかったです。

ぼくは二年生の時、兄と遊んでいる時、事故であたまにけがをしてしまつてびょういんに行きました。その時神様がぼくを守ってくれて、いたみもあまり感じず、ぶじにしゅじゅつがお

わりました。

ぼくが受洗しようと思ったのは、きよねん、おぎのゆうさんが受洗して、イースターにゆきが受洗すると聞いたので、ぼくもいつしよに受洗しようと思いました。

ぼくはこれから礼拝にたくさん出席したいと思います。これからもよろしく願います。

(二〇〇八年三月二三日、
イースター礼拝にて受洗)

信仰告白



田野口 順一

僕は小学校の時、図工の教科書を見てイエス様を知り、またその後姉が英和に入学し、教会に来るようになりました。初めて来た時の皆さんの優しさを今でも忘れられません。来てすぐに洗礼を受けたいと思いました。が親には理解できるはずがありません。それから受洗を思い続け今日に至りました。しかしなぜ今強く洗礼を希望し親の理解を得るまでに至った

かという、神様が命について教えてくれたからです。

以前の僕は平気で友達に「死ね」という言葉を使うような人でした。でも神様はそんな僕に病気を抱える人々に出会わせてくださいました。

中でも最も命を教えてくださいました。方は、同級生の母であり、僕の良き友達である美雪さんという方です。彼女もクリスチャンなのですが、僕は本当によくお世話になり、よく夕飯に呼んでもらったり相談にのつてもらったりし、そんな美雪さんが大好きです。

そんな彼女は三年前癌を患つて何回もの手術を乗り越えてきました。大好きなおばさんだったこともあり、ショックや不安はすごくありました。苦しい日々が続く、だからこそ輝く小さな幸せな一時。今を生きていることがどんなに幸せで、小さな幸せにも気づき、感謝しなければならぬということを感じ、つづつ彼女から教わりました。だから今の僕は「死ね」という言葉は何がなんでも言えません。

しかし逆に今言うことができなくなった言葉があります。「ありがとう」です。僕は命の尊さを知ったことにより小さな幸せでも気づき感謝できるようになりました。

僕は彼女を通して神を見ました。神様が僕に命の尊さを教えてくださいました。だからこそ

僕は洗礼式に、おばさんに来てもらいたかったです。

でもつい三日前におばさんは容態が急変し緊急入院、一秒を争いました。神様に救ってもらえなければ、もう大好きなおばさんはいませんでした。

普通に来ると思つていた洗礼式。僕はここで大きな過ちを犯しました。今日は洗礼の予定日六月一日ではなく五月二十五日です。どんな形であろうと、この礼拝を彼女と守りたいと思い、今携帯のテレビ電話を通じ、この礼拝を共に守っています。彼女は五月二十九日に大きな手術をします。僕の過ちは、自分の焦りや感情で北先生に一週間時を早めてほしいと言つてしまったことです。神様の御心の中で決定してははずの来週を、僕は神の御心を忘れ、自分の感情だけで神より人を優先し行動してしまいました。普通に迎えるはずだった六月一日を前におばさんが急変し、今までの不安が現実味を帯び、洗礼式を見る前に消えてしまうのでは、という恐怖が心にあり、リスクの高い手術をする前の、より元気なうちにと思いました。そのくらい、彼女から教わった命の勉強は非常に大きく強く、神を見ました。

昨日、北先生に呼ばれ、洗礼式とは御心によるもので、あなたは神より人間を優先したと厳しく指導を受けました。そうです。

す。僕はこんな状況の中で、最も大切である御心を忘れ、ただ焦り、恐怖でいる自分の感情が優先し、洗礼式とは何によって行われているのかということを見失いました。御心を忘れてしまったのです。

厳しい指導、神の教えを頂き、作文をもう一度書き直し、クリスチャンとしてどうあるべきか、と自分の犯した罪の悔い改めをすると同時に、今日五月二十五日が、自分勝手に変更してしまいました。こうして「どんな状況であっても、まずは祈り、自分の感情、人間の感情に走るのではなく、神の御心を中心にしてクリスチャンとして歩むように」と教えてくださったこの日が、本当の神の御心であつたことを信じたいです。

今日この日を迎えるまで、北先生をはじめ沢山の人の迷惑をかけてしまいました。すみませんでした。

また親には普段は恥ずかしくて感謝できていません。感謝します。お父さん、お母さん、ありがとうございます。

最後に神様に感謝します。アーメン

(二〇〇八年五月二五日、
主日礼拝にて受洗)



証・感話

2007年7月15日 夕礼拝

証詞

信じるということ



矢崎 裕

見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ／彼は国々の裁きを導き出す。彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。傷ついた筆を折ることなく／暗くなつてゆく灯心を消すことなく／裁きを導き出して、確かなものとする。暗くなることも、傷つき果てることもない／この地に裁きを置くとときまでは。島々は彼の教えを待ち望む。

(イザヤ書 第四二章一〜四節)

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

(ヨハネによる福音書 第三章十六節)

二〇〇七年三月五日の午後三時ごろでした。私は教区の信徒修養会に出席するために、いわゆる雁坂道を少し急ぎ目に運転しておりました。そして会場のフルーツパーク富士屋ホテルへ行くため国道からゆるい左カーブに

入りました。そしてホテルへの道に入った途端に国道を下つてきて右折した大型バスに気づき、ブレーキをかけたが間に合わず、バスの左側に接触し、傷つけるという事故を起こしてしまいました。バスは牧丘町の知的障害施設のもので、十五人ほどの少年が乗っていました。全員無事だということですが、安堵の胸を撫ぜ下ろしました。施設の監督者が早速警察に連絡をしてくれ、まもなく現場検証が行われ、結果的に私の不注意が主たる原因だという結論になりました(左カーブの道の路面上に「一時停止」と書いてあったのにそれを無視した)。

事故の後の相手の人たちのやり取りや、警官との受け答えが実際にどうだったかは、実はあまりはつきりしていません。慣れないことで呆然としてしまつて、ただ早くこの事件から開放されたいとの思いが非常に強かつたためでしょう。損害保険の会社へ連絡し、あとの処理を一切任せて修養会の会場へ向かいました。教会の人たちはすでに清藤兄から内容を聞いており、なぐさめの言葉をたくさんいただきました。感謝でした。

しかしながら、修養会が始まつても私の心には先ほどの事故のことがずっと居座つており、開会礼拝にもすこしも集中できませんでした。いやむしろ事故のことで、胸がいっぱいになってきました。「事故の後、自分のとつた行動はあれでよかったのだろうか。ただ監督の人たちや警官に謝罪の言葉とお礼を述べただけでよかったのだろうか。特に車中の少年たちに一言も謝らずに終わつてしまったのは良くなかったのではないか。動揺した少年がいたかもしれないのに……」そんなことを考えている内に自分のこれまでの人との接触の中で、自分の利をまず考え、他人の被つたかも知れない不利や悲しみについていかに鈍感であつたか、いかに自分が無頓着で、傲慢で、利己心優先であつたかを思わされました。神様に心から罪を悔い、赦しを乞ひ願いました。

また、このとき突然、成人科で学んでいる加藤常昭先生の「十字架上の七つの言葉」というテキストのIV「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」の中に丁寧引用されている高倉徳太郎牧師の「莊嚴なる神秘」と題された説教を思い出しました。一九二八年三月二八日になされた説教ですが、この御言葉についての

もつとも高く評価さるべき説教として加藤先生はその内容を縷々引用しておられます。長いものですからこの証に關係あるところのごく一部を引用してみたいと思います。

「我らの重荷を負いたもう神は、キリストの十字架においてこの叫びをされた。我らの罪の責任を神ご自身が負われたのである。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』において『神の永遠の十字架』が叫ばれたのである。そしてこの叫びのうちに世界と人生におけるもつとも深い実在を見るのである。」

「この叫びのうちにこめられておる秘義を思うとき、我らは、罪というものは、裁かれるものである。一点たりとも曖昧にされ得ないものであることを感ずる。己が暗くところのものは、その刈るところのもの(ガラテヤ9章)となるのである。我らの罪はイエスをして、神のひとり子なるイエスをして、神の御顔を仰ぎ得ざらしめたのである。我らの無頓着、傲慢、利己心はこの深刻なる結果を招いたのであつた。しかも、この十字架において、神ご自身我らの罪を負いたもうた。……」

この引用だけでは十分理解できかねると思いますが、私たち人間の罪によつて御父である神から見捨てられる思いを味わいながら、しかもイエス様(＝神ご自身)我らの罪を背負つて下さつた。それほど人間(この世)を愛しておられるのだ、ということがこの時すつとわかつたように思いました。長い間言葉としては説教でも何回も聴き、論理的？あるいはミッシヨンバラバの告白などからなんとなく納得していたのですが、自分の罪をまざまざと見せつけられ、イエス様の十字架上の悲痛な叫びが心に響いた今、「理解する」あるいは「わかる」ではなく、「信じる」ということをやつと実感できた気分でした。罪を悔い改め、神の義に従い、神様の恩寵にいられたいただきたいと熱い心で願つておりました。聖霊さまの働きを実感したように思います。

以前にもお話ししたように、私が真剣にキリスト教と向き合ったのは、娘が統一協会に入つたことを知り、何とか救出したいと家内とともに飛び回っているところのことでした。そして幸運にも鈴木顕栄先生の知遇をえて、愛宕町教会の木曜夜の祈祷会に夫婦で出席を許されてか

らでした。当時は旧約聖書の創世記のおわりの方を学んでいたと思います。それから七年くらい、聖日の礼拝に出席を許されるまで、旧約の学びが自分の勉強の主なものでした。それが一因か唯一の神、創造主への信仰は素直に心に入りましたが、イエス・キリストと自分との関係が知識としては理解できて信仰には至らないという中途半端な状態がつづいておりました。今回自分の傲慢さ、罪深さを聖霊さまが気づかせて下さり、信者の一人として下さったと思い、ただ感謝でした。

ハイデルベルグ信仰問答の問二にこんな問と答えがあります。

問 それならば、あなたがその慰めの中に、祝福されて、生きて死なぬことが出来るためには、あなたはいくつのことを知らねばならないのですか。

答 三つのことです。第一には、わたしの罪と私の悲惨とが、どんなに大きいかということ、第二には、私が、どのようにして、わたしのあらゆる罪とわたしの一切の悲惨から、救われるか、ということ、第三には、わたしが、どんなに、この救いに対して、神に、感謝すべきか、ということであります。

これからも、聖書のなかの御言葉に絶えず立ち返り、「いつも喜び、絶えず祈り、あらゆることに感謝する」(一テサロニケ五章十六―十八節) 気持で日々を過ごしたいと願っております。



2007年4月26日 祈祷会

証詞

聖書と私



三井 道子

言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。

(ヨハネによる福音書 第一章十四節)

昭和四十六年、その頃私は「カレー＆スパゲティみつばち」という小さな店をしていました。

十一月三日、清藤さんが来店し、ご長男の出生を知らせてくれました。カレーを食べ、ベテルの勉強会に行かれました。年が明けて二月頃、岩間かつみさんが見えしました。「ベテル？」と聞くと、「先週終わりで今夜から旧約を読むんだよ」とのことでした。私は今まで、旧新約共、何回か読み始めては挫折して、始めの一書すら読み切っていませんでしたので、早速次の週二回目から参加しました。「旧約聖書を読破する会」と名付けられ、週毎に未知の扉が開かれていく喜びが一杯でした。

旧約が終わり新約に入り、黙示録の最後、二二章を読み終わつた時の感動は一生忘れません。読み始めて三年目位だったでしょうか、やはり冬の夜、鈴木家の茶の間の丸い大きな炬燵を囲み、節子先生の用意したおでんを頂きながら「やったねえ」と各々抱き合はんばかりに涙ぐむ程に喜び合った純粋な姿がありと胸に残っています。その後も聖書の通読が続き多くの人が加わり、また去り、何時からか祈祷会と一緒に現在に至っていますが、二回目、三回目になると初心を忘れ、マンネリ

で昼に移ったり夜に戻ったり、でも無意識に聖書から離れない年月でした。

十年前前、特に理由はないのですが、今まで以上に聖書が好きになりました。聖書ってこんなに面白いものだった、どうしてもっと早く気付かなかったかと悔やみました。田邊良三先生が優子先生と出会い、献身の道を選んで勉強を始めた姿を見て、私も十年いや二〇年前だったら、同じ望みを持って歩めたかな等思いました。だから各々が勉強し発表し合う祈祷会が大好きでした。注解書の読み方も理解出来ず、全然違う捉え方を発表しても恥とも思わず、めぐることもありませんでした。

そんな時、分区婦人部の有志で、「聖典として聖書を学ぶ会」が発足され参加しました。毎月一書を読み、レポートを持ち寄るもので、六月の創世記から十二月の士師記まで、何の苦もなく喜びで毎日読むことができたのは、長年の習慣が身についたものと感謝でした。でも、その半年前に、緑内障と診断されていた私に限界が迫り、祈祷会さえも続けられない状態になったのです。若い頃、好きで暗記した第一コリント十三章が司会として廻つて来て、その任を済ませたあと、敬愛する兄弟の前で祈祷会に別れを告げました。もう聖書を学ぶことはできない。残された人生に何が残っているだろうか、昼も夜も暗い想いに閉ざされた毎日でした。

そんな時、荻野勉さんが倒れました。病状が絡み合つて医師団の先生方が苦慮されていると聞き、ご家族の方々のご心痛がどんなにかと、想像に余りあるとはこうした時かと思いました。病室に何う度、美枝さん共々、堅く信仰に立つて闘病されて居られる姿に心打たれ、若い時から聖書の御言葉の中でのみ、歩んでこられたご夫妻なればこそ、と心から敬服いたしました。

それに比べて、私は何と情けないと気付きました。病室を見舞つた時、一人で讃美歌を見ていた勉さんに、「聖書も読める?」「うん」「良かったね」、ただそれだけの会話の中で、私は本当に勉さんの病氣恢復を心から感謝しました。真っ暗な辛い失望の毎日だった私を救ってくれたのは、病気に苦しんでいた荻野さんだったのです。聖書が読めなくなっても聞く耳があり、神様からいただいた心があることに感謝しています。

2007年6月28日 祈祷会

証詞

感謝



鈴木 節子

何を食い、何を飲まんと生命の事を思い煩い、何を着んとて身体からだの事を思い煩うな。生命は糧に勝り、身体は衣に勝るならずや。先ず神の国と義を求めよ

(マタイ六章二五〜三三節／文語訳)

私は昭和二十七年四月、鈴木と結婚するため、甲府へ参りました。その数年前、疎開した埼玉の本庄という所にある教会で教会生活を始めました。

女学校を卒業したら女子医専へ進学すべく希望を持ちつつ勉学に励んでおりましたが、あの忌まわしい大東亜戦争が、私たちが住んでいる東京の両親の持ち家と十七軒の貸家を一挙に焼き、父は職も無くし、一辺に生活を変えてしまいました。生命からがら家族と埼玉の母の実家の持ち家へ疎開し、私はあと少しで卒業できる女学校を転校し、希望は絶望に変わってしまいました。そして疎開先の母の実家の内科医院の手伝いが一年後の私の生活になりました。

或る時、クリスチャンの患者さんに強引に勧められて、否々、家の代表で教会の特伝に出席し、その時の講師でいらった小林吉保先生と運命の出逢いをし、頂いた御言葉が先のマタイ六章二五〜三三節でした。

キリスト教の臭いのまったく無い我が家でしたが、空虚な当時の私の心に御言葉はしっかりと根づきました。進学が許されない私は、教会が救いとなり、そこで鈴木と

出逢いました。結婚を勧められましたが、その時は二人とも中途半端で、それより二年を経て、それぞれ学校を卒業し、再度勧められて、私はやがて甲府の住人となりました。今日まで五〇数年！ 早いものです。結婚式を済ませ、三日たってすぐ山梨英和幼稚園が用意されていて、主任として勤め始めました。

「家の教会」であつた愛宕町教会を脱皮して、会堂を建てるのが義母と夫の第一の祈りであり、使命でもあつて、ようやく義母の持ち家を一軒売って元金を作り、教団からも援助を頂き、少数の信徒の献金や当時流行っていた古衣類も岡島や朝日町で販売し、壊れた家の跡地に会堂を建てました（現在、私が住んでいる場所です）。木造でしたが、会堂のある教会生活は本当にすばらしいと思ひました。数人しか集まらなかった信徒もすごい勢いで増え、鈴木は、外へ土地を持ち新しい会堂を祈り始めました。そして今日の教会があるのです。鈴木之母のもとに集まってくださった小さな小さな群から今日在ることは、義母にも夫にもこの上ない感謝であり、喜びであつたことでしょう。

「幼児から御言葉を」と願っていた鈴木は、勤めていた英和幼稚園を辞した私と、幼稚園を学校法人として建てましたが、病に倒れ、六年の闘病生活の末、今から三年前に召されました。しかし、保育園の建設も夫の祈りの中にあつたのでした。

後を引き受けて聖愛幼稚園と二つの「なでしこ保育園」を、私と子供たちで運営していることは、鈴木の祈りと神様のお許しがあつたからと信じ、主に土台となつて頂いて励んでおります。

結婚をはじめ、一つ一つの事業をする時々に御言葉が与えられ励まされました。

善も悪もなさぬ間に神の選びの御旨は動かず

(ロマ九章十一節／文語訳)

もろもろの心づかいを神に委ねよ。神、汝のためにおもひばかり給へばなり

(1ペテロ五章七節／文語訳)

何事も思い煩うな。ただ事々に祈りをなし願いをなし感謝し

て汝らの求を神に告げよ。さらば凡て人の思いにすぐる神の平安は、汝らの心と思ひとをキリスト・イエスによりて守らん

(ピリピ四章六〜七節／文語訳)

《結婚を決めたとき》

我を信ずる者は我なす業をなさん。かつ、これより大なる業をなすべし

(ヨハネ十四章十二節／文語訳)

《事業を始めた時》

ガラテヤの漁師シモンとアンデレのように、「私について来なさい」と言われて、直ちに従うことにより始められた私の生涯は、私の願い以上に祝され、現在に至つて居りますが、「もはや我生きるにあらず。キリスト我うちに在りて生きるなり」との御言葉を終始忘れず、主赦し給う時まで励んで参りたく思ひます。

「汝信すれば、汝の家族をも救はる」とおっしゃった神様は、私の実家の家族をも救ってくださる、妹は牧師の妻となつたことも大きな喜びであり感謝でありました。

2007年8月23日 祈祷会

証詞

み言葉に導かれて



宮澤 栄子

愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者であつて、神を知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によつてわたしたちを生かすようにして下さった。それに

よって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。

（ヨハネの第一の手紙 第四章七〜九節／口語訳）

あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい。（ピリピ人への手紙 第二章十三〜十四節／口語訳）

神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。

（伝道の書 第三章十一節／口語訳）

この聖書の箇所は十二年前、北先生の原簿作成の折りに好きな聖句として私が選んで書いた御言葉です。私は現在七二歳と九ヶ月の人生を歩ませて頂いております。洗礼を受けて五三年になります。その間折り折りに神様から御言葉を頂いて養われてきたわけですが、この三つの聖句が、当時の私の信仰生活のよりどころ、土台となっていたのだと思います。

十数年経った今、もう一度この三つのみことばに向き直ってみた時、今も変わりなく確かな輝きを放って私の歩みを照らし導いて下さることを改めて知ることが出来ました。この証しの時をいただいて心から感謝します。

最初の聖句「神は愛である」。この御言葉に至ります前にイザヤ書に「あなたがたが切り出されてきた元の岩、掘り出された岩穴に目を注げ」とありますので、少し私の切り出され掘り出された岩穴に目を注いで見たいと思います。

まだまだ封建制の強い閉鎖的な小さな村の貧しい農家の片隅から神様は一つの小さな小さな岩を掘り起こして下さった（岩というより石ころに近い者）。三歳の時に母と死別して、家族の皆から愛を受けながら、でも何かが足りないまま少しずつ大きくなって十二歳の時、ちょうど思春期の時期に新しい母がきました。本当の意味での試練のときがきて、その中で種々の思いを悩みながら、その日常から抜け出す力もでなくてもなく、ただ現実を

がままに受け入れるしかない忍従の日々を過ごしていました。そんな中で、それでも私の心の中だけは自由でした。様々な夢を育てました。育てては消し、消しては育て、また消して……。

その時わたしは、遠く遙かなるものを見ていたように思います。遙かなもの、それは希望であったことは確かです。そのような中から神様は一人の兄弟との出会いを通して私を教会に導いて下さいました。家庭の事情であり教会出席はできませんでしたが、夜の祈祷会とか家庭集会などを通して、私の信仰を育てて下さいました。この事も私にとって神様の最善であったことと思ひ深く感謝したことです。少しずつ聖書の御言葉が私の心を支配するようになって、やがて御言葉の力に圧倒されて、心の隙間も足りなかった部分も、求めてやまなかったすべてを豊かに満たして下さった神様の愛、神様は愛だからです。

今私は思うのです。神様は神様の計画の中で、岩穴から掘り起こして下さった時から、無力な石ころに等しいような私を、神様はいつもそば近くにおいて下さっていつくしみ養って下さったと！ 教会に出席することすらままならなかった私を、教会の内側へと導いて下さり、幼児教育の基礎からの学びと、教会生活の訓練という一八〇度転換の出来事をおして、教会から決してはなれられないような場所において、いつも守って下さった。

きのうも今日もそして明日も……。

この様に今も尚不変の神様の真実と愛の確かさを日々身に受けて歩ませていただいている豊かな恵みを心から感謝して、私なりに神様のみに応えてゆく者になりたいと願っております。

第二の聖句「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。すべてのことを、つぶやかず疑わないでしなさい」。この聖句も好きな御言葉で、今でも大切にしております。今までも何回か読み過ぎてきた箇所だったと思うのですが、ある日この言葉に出会った時、ハッと息をのむ程の深い感動に満たされました。「ああ、そうだったのか、そうだった

のだ！」と。今までの自分の歩みの種々な場面の中で、折りになつた願いを起こさせて下さった、いつも私の先頭にあつて導き備えて下さったのは神様であつたのだと気づかされました。そう、あの事も、あの事も皆そうだったのだ、と。一つ一つの出来事の中に改めて神様の御言葉を鮮やかに見させていただいた思いでした。それ以来、この事は神様が起こして下さった願いか私の思いかをいつも問いつつ、「つぶやかず疑わないでしなさい」との御言葉に信頼して、すべてを御手に委ねて、これからも歩んで参りたいと願っています。

第三の聖句「神のなされることは皆その時になつて美しい」。この御言葉で思ったことは、神様のなさる業は皆その時になつて美しい、本当に美しいと思う程に、神様のなさる業は完全であつて何一つ無駄なものもなく、意味のないものはない。時に自分の願いとは異なる答えが返ってくるがあつても、時が経って改めて現実を見る時、「あつ！ 神様の御心はこのことであつたか」と改めて神様の最善を知ることが出来ます。最善以下のことをなさらない。そこに神様の真実を見ることが出来ると思うのです。

最近といっても四、五年の間に我が家に起こった二三の出来事の中に、神様の憐れみと神様の最善を思つて心を新たにさせられた事を少しお話しさせていただきます。

一所懸命働いて神様から添えて与えられて、息子たちと同居のための二世帯住宅を建てました。ローンを組んで持金もすべて使い果たしました。私の実家の二人の姪の後見人としてお札に土地を頂いてあつたのですが、少し売って老後の資金に当てるつもりで計画しておりました。区画整理されて残った土地は正方形に近い形状でした。横にも縦にも分けられないと云うことで土地は売れないことになり、年金生活を余儀なくさせられるに至りました。その様な状況の折り、まだ姪の財産を管理しておりました。その姪の積み立て保険が満期を迎えたので送金いたしました。二日ほどして電話があり、叔父ちゃん（銀行口座番号を教えたこと。何事かと思ひながら知らせますと、翌日また電話があつて、少し沢山お礼を振り込んだとのことでした。二・三日後、主人が

確認してきました。なんと利息を含め五七五万円の内三〇〇万円を主人の口座に振り込んでくれたのです。主人も私も顔を見合わせて……。主人は「このお金は使えないよ」とポツリと言いました。「あの子が何か必要な時に使うように預かっておくよ」と言って、思いがけない姪の好意にとまどった様子でした。

前後しますが、私の実家の二人の姪の後見人と云うのは、私たち家族の人生の青写真には載っていないが突然降って湧いたような大きな仕事。この事はおもに主人が用いられた出来事でした。二人の姪の両親、祖父母亡き後、後見人として長きに亘って借家の管理から農事、近隣の冠婚葬祭の一切を何よりも二人の子供の後見役として一生懸命働いてくれた叔父ちゃんへの感謝の気持ちであつたに違いないと、私自身胸の熱くなる思いでした。身内の叔母ちゃんではなく、他人の叔父ちゃんに感謝を表した姪の心の成長が何よりもうれしく天を仰いで神様に心から感謝の祈りを捧げたことでした。神様のなさる業は、このように人から人へ、ここからこころへと思いや感謝をつなげてゆくことの大切さや尊さ、美しさを伝えてくれたような出来事でした。

次に教会の土地献金について。

先に家を建てる時、持金は全部使い果たしたと言いましたが、実は私個人の定期が少しありました。これだけは七人家族、なにが起るかかわからないし、教会の献金も予測して虎の子にして持っていました。しかし娘の離婚騒動があつて住宅ローンの名義変更等の件で現金が必要になり、私の虎の子が役立つ羽目になってしまいました。多くもなく少なくもなく、その全額でまかなわれませんでした。このことのために神様が備えてくださった様に！土地献金はどうしよう、そんな思いでいた時、ある日郵便保険の集金人が来ました。あ、そうだ、これが使えらるかも！満期日が二〇〇五年六月とありました。コツコツと積み立ててきた保険、これもまた土地献金のために備えて下さった出来事に思えました。ある人からは、「そんな愚かなこと」とも言われました。主人からも「今、家にとってこのお金がどれだけの価値があるかわかるだろう！」とも言われましたが、私の中ではすでに決心がついていました。私は主人にきちんと向き直って、神様

が今日まで手の業を祝して下さったこと、折りにかなった助けをもって、いつも守って下さったこと、この三月をもつて無事に三五年間の仕事（託児所）を終わらせて下さったこと、最後に残されたこのお金は神様にお捧げするのが一番ふさわしいと思う。このお金は是非神様に捧げさせて下さい、と真剣に頼みました。主人は黙って認めてくれました。本当に有難く感謝の出来事でした。結びとして、《信ずる者を恥かしめ給うことなし》《おろかなりとも迷うことなし》

2007年10月25日 祈祷会

証詞

今日まで主に導かれて



笹本キミエ

いかに幸いなことか／神に逆らう者の計らいに従って歩まず罪ある者の道にとどまらず／傲慢な者と共に座らず／主の教えを愛し／その教えを昼も夜も口ずさむ人。／その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び葉もおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。

（詩編一編一～三節）

友達に誘われ、赤池さんの家での家庭集会に出席しました。ボイヤ先生も来てくださり、その後、山中先生も来てくださり、切石にも伝道所が出来ました。昭和三四年の十二月二二日に洗礼を受けました。

先生の所に子供が生まれました。幸子さんです。翌年には切石にも教会が建ちました。花輪さん、赤池さん、天野さん、熊さん達がお茶やのりを売って歩きました。そうです、教会のために。

昭和四二年には子供が生まれました。

巨摩教会では三時からの礼拝でした。昭和四八年に徳田先生が赴任してからは、午前中の礼拝を守れるようになりました。この頃から教会に行くことができるようになりました。

昭和五九年に南関東整備会社に勤めるようになり、鰻沢青柳の電話局に勤めました。その後、新甲府昭和電話局に回され六三年九月に玉川団地に入居しました。

年が変わって平成になり、平成三年に父を亡くし、平成五年に母を亡くしました。

愛宕町教会に行くようになったのは平成五年六月頃からです。

平成六年十一月二二日に、バイクに乗っていて、出会い頭に自動車とぶつかり五〇日くらい入院しました。

平成七年十二月三〇日をもって退職となりました。年が明けて四月にまた仕事をすることになりました。六五歳になったので退職させてもらいました。

いろいろな事がありました。今日まで守り導かれて教会に行くことが出来ますことを感謝いたします。



二〇〇七年度夏期伝道実習報告

新しい出発



東京神学大学大学院一年 北村 誠

この度、愛宕町教会にて夏期伝道実習を行うことができましたことを、神様の前に心から感謝いたします。特に指導して下さった北先生やご家族の皆様、愛宕町教会の一人一人の皆様の根気強いご指導や励ましがあつたからこそ、無事に夏期伝道実習を終えることができたと感じております。有り難うございました。

今回の夏期伝道実習は慌ただしく過ぎていきました。九州にも行き、長崎では原爆資料館を見てくることができました。丹波山村ではローラー滑り台を滑るため、何度も長い階段を駆け上がりましたし、中高生キャンプでは海にぶかぶか浮かんで魚獲りもしました。

★
例えば七月十四日のサマーフェスタに参加するため、その日の朝早く愛宕町教会へと出発したのですが、ひどい雨に降られ、この夏期伝はどうなる事か一抹の、いや大きな不安を抱

え、この甲府へとやってきたことを覚えていません。実習最終日を迎えた今では、何か懐かしいような、つい昨日のことのような複雑な思いがします。この文章を書いている今現在も、夏期伝道実習が終わるということに何か実感がわかず、この教育館での暮らしが私にとつての日常のような気がしているのが現状です。

でも、自分の努力や頑張りによつて解決できない問題なので。こればかりは神学書や注解書を読んでも助けにはならないです。

私は神により頼んでいない。神を必要としていない。今にして思えば私はどのような事柄も、自分の努力や頑張りで乗り越えられると思っていました。まさしく人間の行いで全てを解決してきたのです。そのことのゆえに私の語る話は人間の立場、人間の思いから語られていたのです。それでいて福音だと勘違いしていたので笑い話にもなりません。その根底から覆された今、逆にみ言葉に向き合わざるを得ないというのが現状です。これはある意味非常に不思議なことですが、聖書のみ言葉により頼まざるには、すがらざるには得ないということを思い知らされました。それは聖書の読み方、向かい方から始めなおすことを意味しています。そういう意味でこの夏期伝が終わつ

てこういう風に成長した、といった形ではなく、今までの姿勢ではやっていけない。ここからの新しい出発になるわけです。

★
考えてみれば、もし他の教会に夏期伝道実習に行っていたならば、これらの問題には気がつかないまま牧会の現場に行くことになっていたかもしれません。教会に赴任して現実に直面するならばまだしも、そのまま自分の間違いに気がつかないまま牧会していたとしたら、恐ろしく考えることもできません。そうなるのであればこれは私個人の問題だけでなく、教会自体の問題になってしまふのです。その過ちの前に新しい出発ができることを感謝しています。

★
また愛宕町教会の、教会員の皆様の教会に対する、伝道に対する情熱も私には驚きと励みになりました。

駐車場の土地購入の件は、私が入会してから最初の礼拝で臨時総会が開かれ、教会員の皆様どのような思いでこの土地購入に取り組んでいるのかをまじかに感じさせていただきました。また、毎週礼拝後に交わりコーナーを開き、交わりを大切にしている、これは並大抵の御苦労ではないと思います。バザーにもまさしく教会全体で取り組んでいる姿も拝見させていただきました。参加できないのがつく

づく残念です。

★
最後にこの夏期伝道実習で指導して下さった北先生の御苦労がしのべれます。有り難うございました。

また皆様が家庭集会を開いて下さり、励まして下さったことは私の宝になりました。集会や交わりに気兼ねなく招いて下さったことも感謝しています。

CSも私は特別に何かしたわけでもなく、ただ一緒に遊んでいた上最後に歌や手紙まで頂いたこともとても感激しました。

畑で草取りしたことも、耕運機で畑を耕し、うねを作りそば蒔きしたことも、駐車場の整備をしたことも、びつくりするような力ミナリも、すべて私には貴重な思い出になりました。私のこれからの歩みの出発点として、これらの思いと共に励みになることと思います。この愛宕町教会での夏期伝道実習を備えて下さった神様に感謝してやみません。

これから愛宕町教会で出会わせて下さった皆様のために、ご指導して下さった北先生とそ

のご家族のために、何よりも愛宕町教会の伝道がより一層活発なものとなりますようにお祈りいたします。

皆様、本当に有り難うございました。

テーマは
「命のはじまり」
創世記1～3章

2008年7月28日(月)～29日(火)

夏期学校 in 丹波山村



2日目には、1日目から4つのグループに分かれて製作したカルタで、創世記の学びを発表しました。



今年のCS夏期学校は、丹波山村の民宿「たちばな」を会場に、幼・小・中、石和教会CS合同、天候にも恵まれ、参加者全員「元気いっぱい！楽しく！無事に」行われました。



川遊びやキャンプファイヤーは、みんな大好き。



7 12 土曜日

ひのき植林地の下草刈り

げどう
甲斐市吉沢外道

植林したひのきは
背丈5メートル程にまで
成長しています！

農事山林部

報告：雨宮健

午前9時、甲斐市吉沢の農協前に集合。軽トラ2台で山林現場へ。参加者は6名。天気は晴れ、蒸し暑い。1時間ごとに休憩を取りながら水分を補給し、下草刈を行った。草刈り機が大活躍(写真右)。やはり機械でないと人力では無理のようである。正午に作業を終わり、農協前でおにぎり・ジャガイモを頂く。汗をかいたので塩味が心地よかった。皆さんの奉仕に感謝して解散。

今年の秋頃、枝打ちを行う必要があります。ヒノキの幹の直径がビール瓶ほどが良いとのこと。次回の作業には大勢の方々のご参加を!!



これからの予定 …… 奮ってご参加・ご協力・ご加祷ください。

★ 9月20日(土)・21日(日) 教会全体研修会 《今年は3年連続研修会の3年目です》

講師／近藤 勝彦 先生(東京神学大学教授 組織神学)

20日《午後》 講 演Ⅰ／「正しい聖礼典の回復」 コリントの信徒への手紙Ⅰ11・23～26

21日《午前》 主日礼拝／「イエス・キリストを着なさい」 ローマの信徒への手紙13・11～14、ガラテヤの信徒への手紙3・26～29

《午後》 講 演Ⅱ／「現代における聖霊の信仰」 ローマの信徒への手紙8・14～23

★ 10月19日(日)午前11時30分～ 第26回 教会バザー

編集後記

▼会報「いずみ」は当初、年二回発行を目標としておりました。しかし、編集担当の怠慢と教会の財政的なこともあり、年一回の発行となつておりますことをお許しください。

▼この頃は夏期伝実習生を迎えるたびに、何とか実習が終わるまでに間に合わせ、持たせよう…そんな追われた状態です。

▼前号に引き続き今号も、昨年度洗礼を受けた方々の信仰告白と、夕拝・祈禱会での証詞を特集しました。

▼信仰告白：「救いの時」、それは人知を超えた「主の時」であることを改めて思います。特に、教会学校に集う子どもたちが神様に与えられ救いに至ることとは、何と素晴らしいことでしょうか。教会学校の地道な種まきに頭が下がります。

▼証詞からは、それぞれの人生における神様の御心、御支配を思われます。各人共、折々に必要な御言葉が与えられ、支えられての歩みであることに、読む私どもも励まされ感謝です。